

平成29年度 金沢大学資料館特別展

加賀
藩校
扁額

～明倫堂・経武館～

藩校に関する略年表

和暦	西暦	事項
正徳5年	1715年	新井白蛾、江戸に生まれる。
延享2年	1745年	前田治脩、加賀藩6代藩主前田吉徳の十男として生まれる。
寛延元年	1748年	前田直方、前田土佐守家5代当主前田直躬の三男として生まれる。
安永2年	1773年	富山藩6代藩主利興が富山城内総曲輪に「広徳館」を設立
安永5年	1776年	新井白蛾『古周易経断』刊行
安永6年	1777年	前田直方、5月に人持組頭となり、正式に年寄衆となる。同12月従五位下に叙され、土佐守を称するようになる。
寛政2年	1790年	寛政異学の禁
寛政3年	1791年	加賀藩11代藩主前田治脩が新井白蛾を招聘
寛政4年	1792年	前田治脩が出羽町（現在の兼六園内）に「明倫堂」及び「経武館」を設立。 新井白蛾歿（1792年7月2日）
享和3年	1803年	加賀藩校における学政修補が行われる。
文化11年	1814年	前田直方「御財用方覚書」を記す。
文政5年	1822年	加賀藩校の場所を仙石町に移す。
文政6年	1823年	前田直方歿
天保10年	1839年	加賀藩13代藩主前田斉泰が学政修補の検討を命じる。
天保11年	1840年	加賀国大聖寺藩11代藩主前田利平が藩邸の書院を「学問所」として経書を聴講させる。
天保13年	1842年	上野国七日市藩11代藩主前田利豁が「成器館」を設立
安政元年	1854年	加賀国大聖寺藩12代藩主前田利義が「時習館」を設立
安政元年	1854年	加賀藩13代藩主前田主斉泰が柿木畠の地に「壮猶館」を設立
明治元年	1868年	「経武館」と「壮猶館」が合併、南町に「道済館」が設立
明治2年	1869年	松原町に「致遠館」、金沢城内に「挹注館」が設立
明治3年	1870年	「明倫堂」が閉校 大手町に「医学館」、辰巳御殿内に「鉦山学所」が設立
明治4年	1871年	廃藩置県



加賀藩校絵図及び儀式風俗図絵蔵 如春「明倫堂と経武館」(『加賀藩年中行事図絵』, 昭和7(1932)年, 金沢大学附属図書館蔵)

ごあいさつ

今回の特別展は、9月30日・10月1日に金沢市で開催される「全国藩校サミット」と連携して開催するものです。「全国藩校サミット」は、全国の藩主子孫および藩校関係者が集い、藩校教育の伝統や精神を再認識し現代に受け継ぐことを目的としています。

金沢大学は、文久2(1862)年に開設された加賀藩彦三種痘所を創基としていることから、加賀藩校も金沢大学の源流ととらえることができます。そして、金沢大学資料館が所蔵する加賀藩校の「明倫堂」および「経武館」の扁額は、遥か225年前に藩校が金沢の地に学問の拠点として築かれ、そこで培われた学問を重んじる伝統と精神を今に伝えています。

「明倫堂」と「経武館」は、寛政4(1792)年に11代藩主前田治脩^{はる なが}によって創設されました。明倫堂では儒学、天文学、算学などを、経武館では馬術、剣術などを教授していました。本特別展の中心となる2つの扁額は明倫堂と経武館に掲げられていたものです。それぞれの揮毫^{きごう}は明倫堂初代学頭の新井白蛾^{はく が}ならびに前田土佐守直方^{なお ただ}によるものであり、細工は両扁額とも加賀藩細工所の木彫師である沢阜忠平^{さわ おか ちゅう へい}の手によるものです。また、この扁額は現存する全国諸藩の藩校扁額のなかでも最大級のものです。

このように、2つの扁額は学都金沢の原点となる2つの藩校の威容と歴史を現代に伝える第一級の文化財といえます。この他、この特別展では、藩校に関連した多くの資料も合わせて展示しています。

皆様には、本特別展をご覧いただき、200年を超える長きにわたって伝えられた学都金沢の伝統と精神を体感していただき、将来においても学問の拠点であり続ける学都金沢を思い浮かべていただければ幸いです。

最後に、本特別展の開催にあたって様々な方面からご協力いただいた皆様に、金沢大学資料館を代表して心よりお礼申し上げます。

金沢大学資料館長
奥野 正幸

目次

ごあいさつ	1
1. 藩校とは	2
加賀藩藩校の成立	
前田家に関わる藩校	
2. 加賀藩校明倫堂・経武館の扁額	6
3. 新井白蛾と前田直方	10
新井白蛾とその時代	
「経武館」扁額を揮毫した前田直方について	
コラム	14

出品資料目録

1. 藩校とは

加賀藩校
扁額

～明倫堂・経武館～

❁ 加賀藩藩校の成立

上田長生(金沢大学人間社会研究域准教授)

新井白石をして「天下の書府」と賞された加賀藩に、藩校「明倫堂」と「経武館」が設けられたのは寛政4年(1792)3月のことである。和漢の典籍を広く収集し、「書府」の礎を築いた5代藩主前田綱紀も、孔子廟と学校の設置を「大願」の一つに挙げていたが、実現には至らなかった。ついで藩校設置の意志が明確に分かるのは10代藩主重教^{しげみち}で、その遺志を実現させたのが11代藩主^{はるなが}治脩であった。寛政3年(1789)6月には、新井白蛾^{はくが}の学頭任用について治脩の内意が示され、年寄奥村尚寛^{ながのぶ}と白蛾の間でやりとりが行われている。また、天明6年(1786)からは毎月2回、金沢城の金谷御殿で御儒者に経書講釈をさせ、組頭から物頭まで聴講を許している。かかる天明・寛政期の教学政策の盛り上がりは、ひとり加賀藩にとどまるものではなかった。松平定信が推進した寛政改革を背景に、近世を通じて全国で最も多くの藩校が設立されたのがこの時期であった〔笠井1960〕。支配が揺らぎはじめた幕府・諸藩は、社会秩序の立て直しや、有能な人材の育成・拔擢などを教学面からも進めようとしたのである。

では、加賀藩の藩校は、具体的にどのような目的で設置されたのだろうか。設置時の布達冒頭には「四民教導のため」とあり、藩士に限らず百姓・町人の修学が認められている。こうした領民を含む「四民教導」が求められた背景には、「漸々懦弱に成り、四民利を知りて義を知らず、上下交々利を争ふ」(「奥村・新井問答書」)ことで、上下ともに財政が悪化し、風俗が悪化していると奥村尚寛が指摘する状況があった。庶民にも門戸が開かれていたことは加賀藩藩校の顕著な特徴で、少ないながらも庶民の修学があったようだ〔江森1990〕。庶民を含む藩内の道德的な風俗教化が目指されたことは、享和～文化年間に藩主であった12代^{なりなが}齊広が、家中・領民に繰り返し教諭を行ったこととも関わっている。だが、当初は「四民」の風俗教化を目的に掲げた明倫堂も、数度の学制改革を通じて、藩に有用な藩士の育成に重点がおかれるようになっていった。

次に、明倫堂での実際の教育をみてみよう。明倫堂では、朱子の「白鹿洞書院揭示」が掲げられていたことから

分かるように、主として朱子学が講じられ、和学・律令・天文学・暦学・算法・礼法・医学・本草学も教授された。講日は藩士の階層別となっていた。開学当初の教師として、学頭には新井白蛾が任命されたが、間もなく病没した。以下、助教に年寄村井家の元家臣長谷川準右衛門と白蛾の子新井升平、助教御雇に渋谷潜蔵・中島半助・林柏堂、他に読師などが任命された。渋谷ら3人は重臣の家臣、つまり陪臣で、以後も教師の身分は低かった。こうした事情は多くの藩に共通するもので、加賀藩の教師も、身分の低い師に服さない生徒への教授に苦心し続けている。

一方、生徒は、14歳までは各自で素読を習う素読生とされ、15歳から23歳が明倫堂で講釈を受け、会読を行った。会読とは、複数の者がテキストを討論しながら読む共同読書で、幕府の昌平黌や多くの藩校で取り入れられた[前田2016]。

なお、加賀藩藩校のもう一つの特徴は、武学校たる経武館も同時に設置されたことである。寛政4年の定書によれば、経武館設置の目的は、「治に居て乱を忘れざるは武士の本意」と、平常から武芸を嗜むこと、さらに「忠誠の志」を養うことにあった。経武館の師範人は、藩士のうち、剣術・弓術・馬術・鎗術・居合・組打・軍螺・柔術などに秀でた者が選ばれた。師範人は、普段自らの稽古場で門弟を指導し、毎月あるいは隔月の定められた日に門弟を連れて、経武館で稽古を行った。師範人は、時期によって40～70人の間を推移したが、その多くは明倫堂の教師同様に陪臣であった。初めは、剣術・鎗術・馬術などが中心であったが、安政元年(1854)以降砲術が加えられ、次第にその割合が大きくなっていった。西洋流兵学の導入が進んだ結果、明治元年(1868)には西洋流武学校の壮猶館と合併して、経武館はその役割を終えた。

近世後期社会の揺らぎの中から生まれた藩校をめぐって、近年、明治維新との関連についても議論が深められつつある。加賀藩の明倫堂は、大部の『日本教育史資料』に加え、金沢市立玉川図書館近世史料館の加越能文庫などに関連史料が豊富に残されている。また、金沢大学資料館が所蔵する「成瀬正居日記」のように、藩士の修学の様子が分かる史料も存在する。今後、それらの読み解きを通じて、近世社会や明治維新において藩校が果たした役割のさらなる解明が期待される。

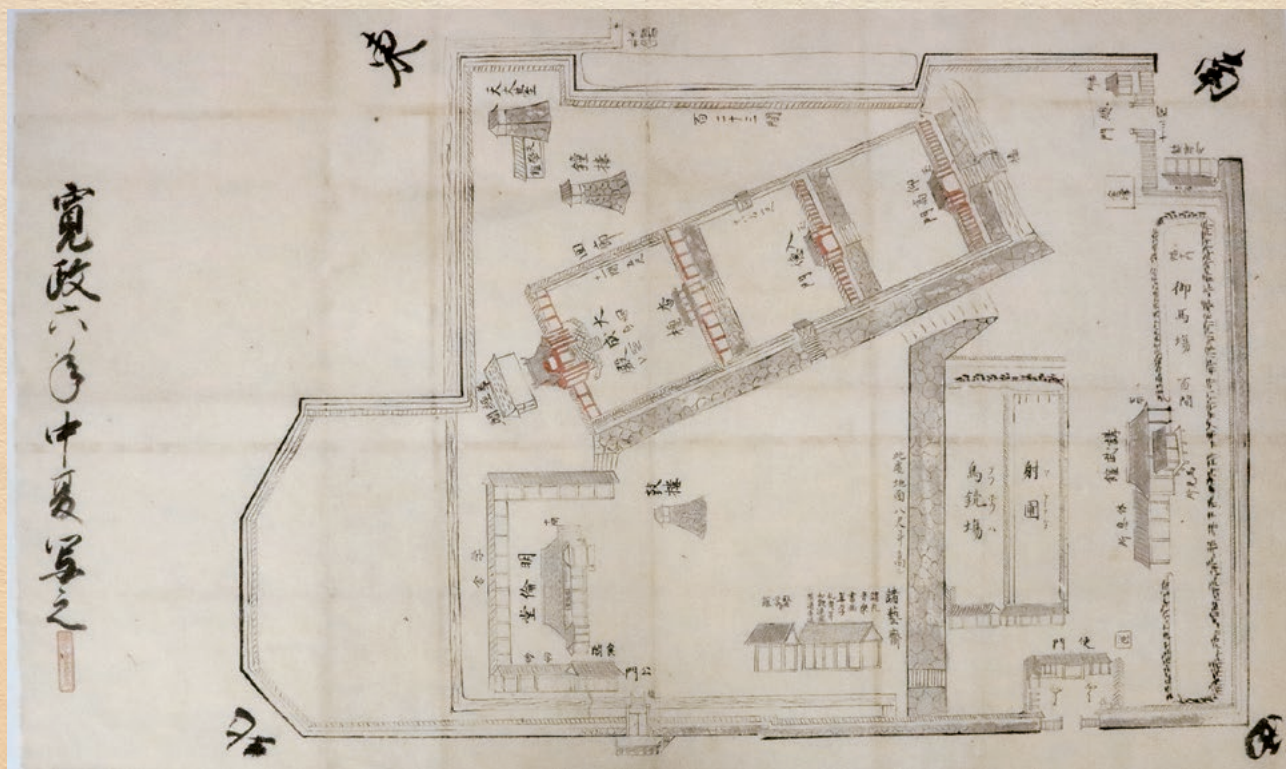


図1「明倫堂・講武館等之図」(寛政6(1794)年中夏、金沢市立玉川図書館近世史料館蔵)兼六園内にあったこの両学校図画面中部に描かれている「大成殿」(孔子廟)を建設するための予定図であるが、実際に大成殿が建てられたという記録は残っていない。

❀ 前田家に関わる藩校

松永篤知(金沢大学資料館特任助教)

全国に藩校はあまたあるが、加賀藩校を含め、「前田家に関わる藩校」に焦点を当ててみよう(図3)。

前田家に関わる藩校のうち、最も古いものは加賀藩の前田本家によるものではなく、越中国富山藩(富山県富山市)の前田分家(寛永16(1639)年、加賀藩3代藩主利常の次男利次が富山に分封されて成立)によって作られた。富山藩6代藩主利興が安永2(1773)年に設立した「広徳館」(図2)がそれである。利興は、日光東照宮修復手伝普請などによる財政難の中、富山城内総曲輪の地に藩校を建てることを決断した。館名は、『詩経』の一節に拠る。その後、広徳館は文化7(1810)年に富山城三ノ丸西に移築され、文学・武術の稽古所が分離することになる(本館1棟:文学、他3棟:武術)。藩士子弟は広く入学対象とされ、中でも秩禄400石以上の高知組の嗣子で15歳以上の者は、3年間必ず入学させられたという。広徳館には、禄高による寄宿・学費補助や、成績優秀者の昌平黌留学といった支援制度があり、勉学を奨励する富山藩の教育姿勢がうかがえる。

この広徳館は、明治元(1868)年に火災で焼失したが、民家を借りて継続し、明治2(1869)年には二番町に移転、「藩学校」と改称する。この藩学校には、総曲輪の民間邸宅に置かれた分校があり、富山藩で初めて一般町人の入学が許された。しかし、明治4(1871)年の廃藩置県とともに、藩学校は廃校となった。

前田本家が治める加賀藩では、広徳館に20年近く遅れて藩校が設立された。これが、「明倫堂」・「経武館」である。詳細は別頁に譲るが、寛政4(1792)年、加賀藩11代藩主治脩が出羽町に両校を設立した。明倫堂は朱子学を中心とした文学学校、経武館は各種武術を教えた武学校である。特筆すべきは、入学対象が藩士子弟に限らず、士庶共学とされたことである。両校とも、文政5(1822)年には、仙石町に移転している。

安政元(1854)年には、13代藩主斉泰が柿木本島の地に「壮猶館」を設立する。これは、幕末における欧米列強の進出に備えた、洋式の兵学校であった。

明治時代に入ると、加賀藩校は新設・統廃合を繰り返す。明治元(1868)年、経武館・壮猶館が合併されるとともに、南町に「道済館」(仏学・英学など)が設立された。明治2(1869)年には、松原町に「致遠館」(英学など)、城内に「挹注館」(英学など)が設立されている。また、明治3(1870)年には、大手町に「医学館」(西洋医学)、辰巳御殿内に「鉦山学所」(鉦山学など)が設立されている。そしてこれらの学校が、明治4(1871)年の廃藩置県までにさらに統廃合され、「中学東校」・「中学西校」の二校時代を経て、「金沢中学校」となる。しかし、それも明治5(1872)年には廃校を迎える。

19世紀中頃、もう一つの前田分家(寛永16(1639)年、加賀藩3代藩主利常の3男利治が大聖寺に分封されて成立)の領地である加賀国大聖寺藩(石川県加賀市)でも、藩校が設立された。天保11(1840)年、11代藩主利平が藩邸の書院を「学問所」と称して経書を聴講させたのが、大聖寺藩校の始まりである。その後、藩校は安政元(1854)年に12代藩主利義が建てた「時習館」に移り、漢学教育の場となる。さらに、安政4(1857)年には、14代利鸞が「有備館」を設立し、諸流派の武術を教えた。明治2(1869)年、時習館に「啓蒙舎」(幼学所)・「成徳舎(後に温知舎)」(通学生の漢学専修)・「達材舎」(寄宿生の漢学専修)・「董正館」(洋学専修)の4館が附設される。同じ頃、兵学校である「操練所」も設立され、これら文武学校を総じて「藩学校」と呼んだという。

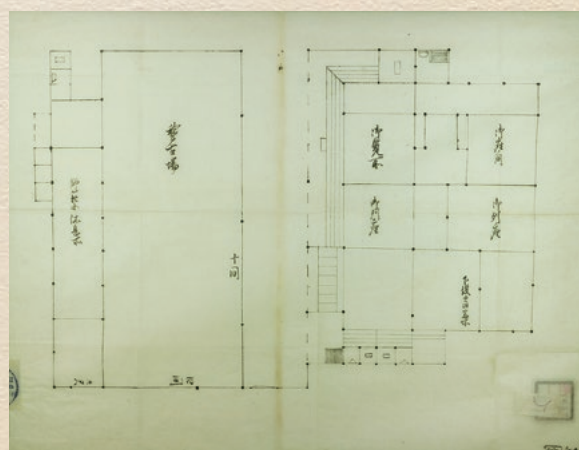


図2 「広徳館絵図」(玉川図書館近世史料館蔵)

1. 藩校とは

以上は、加賀藩およびその分藩の藩校であるが、前田家に関わる藩校はもう一つある。それは、^{こうつげ}上野国^{なの か いち}七日市藩（群馬県富岡市）の「成器館」である。七日市藩は、加賀藩前田本家初代利家の^{とし いえ}5男利孝が、大坂の陣の武功によって立藩した藩である。その11代藩主^{とし あきら}利豁が、天保13(1842)年に成器館を設立した。そこでは、8歳以上の藩士子弟が、漢学を中心に兵学・砲術などを学んだという。

改めて整理すると、富山藩の広徳館、加賀藩の明倫堂・経武館・壮猶館、大聖寺藩の学問所・時習館・有備館、七日市藩の成器館およびそれらの後身校・附設校が、前田家に関わる藩校である。いずれも、藩士子弟らに文武両道の教育を施し、各藩における人材育成の要となった。その賜物であろうか、江戸時代から明治時代初頭にかけて多くの藩が消えていく中、加賀藩・富山藩・大聖寺藩・七日市藩のいずれも、廃藩置県まで存続している。



図3 前田家に関わる藩校の位置(縮尺不同, 1860年頃)
『加越能近世史研究必携 第2版』『上州の諸藩(上)』などを参考に作成

2. 加賀藩校

加賀藩校
扁額

～明倫堂・経武館～

明倫堂・

経武館の扁額

❁ 加賀藩校明倫堂・経武館の扁額

笠原健司(金沢大学資料館学芸員)

扁額は建築物の内外に掲げられるもので、出入口及び門に設置される場合はその施設の名称が書かれることが多く、室内であればその施設の設立に関わる文言や創設者の思いなどが書かれることもある。『国史大辞典』によると「古代中国の宮廷廟祠などの門殿の表上部には、その名称を署した木札を掛け、これを扁または額と呼んだ。」とある。「扁」の文字は「戸」と「冊」の会意文字であり、意味は「木の札を門戸に掲げる」である。縦型、横型などの形式が登場するのは漢時代であり、額縁(外枠)に装飾が施されるようになるのも同じころとされる。扁額という名称が熟字されるのは唐時代であり、日本には飛鳥時代に伝播したとされ、鎌倉時代以降に室外室内の扁額が発達する。

「明倫堂」「経武館」の扁額は横長の一枚板(檜材)の額面に、上下左右4枚の額縁が金具で連結されている。額縁は端が手前に傾斜して起き上がっており、花先形の意匠がある。扁額における花先形の装飾は鎌倉時代から使用されているというが、本扁額のように花先形と花先形の間に別の線形を配するのは南北朝時代からとされる。とはいえ、本扁額の制作年代は寛政4(1792)年であり、安土桃山時代を経て江戸時代中期まで長きにわたり伝統的に使われていた意匠を採用したものである。

いずれの扁額も年月を経て全体に色が失われているが、いくつかの箇所から原色を推察することもできる。額面は「明倫堂」「経武館」の文字が額彫りで表されており、金箔が施されている。文字の背景部分は黒色、縁には緑がみられる。色材は不明だが、金箔との組み合わせで言えば黒は漆である可能性が高く、退色の度合いが低い緑は緑青が使われているといえる。額縁の表面には砥粉と思われる下地が残っており、縁には金箔が残っている。

表面には黒い塗料がみられる箇所もあり、額縁同士が接合される4つの角と上下の額縁の縁の中央部には金属の細工が施されている。裏面には色はみられないが、木目を見ると「板目取り」であることがわかる。

扁額は建築物の内外に掲げられると述べたように、本扁額も学校の入り口及び入り口付近に設置されていたことが金沢市立玉川図書館近世史料館所蔵の「明倫堂・講武館等之図」(大友文庫)及び「学校図并表」(加越能文庫)で確認することができる。前者は両学校が現兼六園のあたりにあった頃の図であり、明倫堂の正面に扁額が描かれている(図4)。後者は両学校が仙石町にあった頃の図であり、10枚の藩校平面図及び表で構成されている。このうち「御玄関前出向之節図」の明倫堂入口部分には「御学」と書き込まれた箇所がある(図5)。経武館の扁額についてはいずれの図にも書き込みがない

ため、学校のどこに掲げられていたかは分からないが、いずれにしても非常に大きく、重量もあることを考えると、明倫堂扁額と同様に室外に設置されていたのではないかと推測される。扁額を室外室内に設置するには、^{かんにゅう}嵌入するか、釘などで打ち付けるか、掛けるかの三つの方法がある。加賀藩校扁額の場合は、いずれも背面に金具が上部に二か所、下部に三か所の計五か所取り付けられており、これらの金具を使って壁面に掛けてあったものであり、いわゆる「^{かけがく}掛額」といわれるものである。金具の形態は上部と下部で異なり、上部の金具は固定された輪であるのに対して下部の金具は稼働する輪が鎖のように付けられている(図6)。藩校があった時代に扁額がどのように設置されていたかは定かではないが、石川県師範学校の講堂に掲げられていた時期(cf.

コラム:『学校沿革史 石川県師範学校』にみる「扁額」と「加賀藩校」)の写真からは、講堂正面の上部に前傾の状態で見られていたことがわかる。現在の両扁額の裏面には釘等の傷跡がないことから、これらの金具を使って設置されていたものと考えられる。

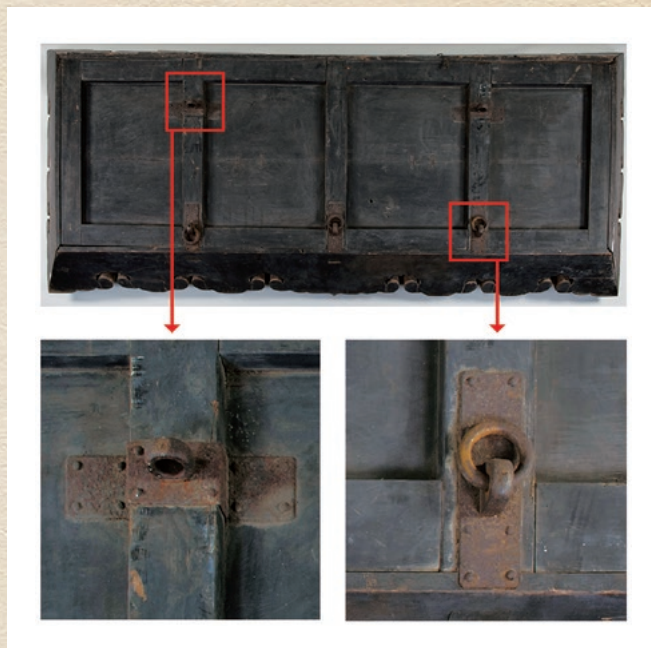


図6 明倫堂扁額の裏面



図4 「明倫堂・講武館等之図」
(寛政6(1794)年、金沢市立玉川図書館近世史料館蔵)
朱書きの丸は筆者が加えた。

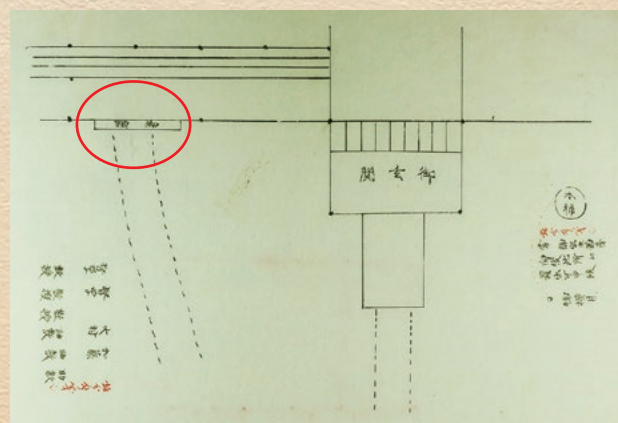


図5 「学校図并表」の「御玄関前出向之節図」
(天保9(1838)年、金沢市立玉川図書館近世史料館蔵)
朱書きの丸は筆者が加えた。



❁ 加賀藩校扁額「経武館」

制作年 寛政4(1792)年

法 量 全体:270cm(W) × 120cm(H) × 40cm(D)

額面:235cm(W) × 85cm(H)

重量:100.1kg

揮 毫 まえ だ と そのかみ なお ただ
前田土佐守直方

額細工 さわ おか ちゅう へい
沢阜忠平



❁ 加賀藩校扁額「明倫堂」

制作年 寛政4(1792)年

法 量 全体:280cm(W) × 130cm(H) × 40cm(D)

額面:242cm(W) × 91cm(H)

重量:107.6kg

揮 毫 あら い ほか が
新井白蛾

額細工 さわ おか ちゅうへい
沢阜忠平



3. 新井白蛾と 前田直方

加賀藩校
扁額

～明倫堂・経武館～

❁ 新井白蛾とその時代

小島毅(東京大学大学院人文社会系研究科教授)

昭和4(1929)年刊行の『石川県史』第参編の第三章第一節「学校」は、明倫堂創設の経緯をこう記している。

是を以て十一世前田治脩は、己れ之を成就せんと欲し、老臣奥村河内守尚寛・横山山城守隆従・前田大炊孝友等に命じて、校舎造営の事に当たらしめしに、尚寛等命を奉じ、寛政三年九月工を起し、四年二月に至て竣りしかば、先に京師より聘したる老儒新井白蛾をして之が学頭たらしめき(202頁)。

寛政3年は西暦1791年にあたる。江戸では松平定信(1758-1829)による寛政の改革が進み、この前年には学問所における朱子学以外の授業が禁止されている(寛政異学の禁)。学問所はそれまで幕府お抱えの儒者林家の私塾であったが、寛政の改革を機に幕府直轄の学校に変貌していく。昌平坂学問所とか、昌平黉(黉は学校の意)とも呼ばれた。昌平は儒学の開祖孔子の郷里の名である。

寛政の改革は日本全国に学問ブームを巻き起こし、各地に藩学(藩校)が設立された。金沢藩の場合もこの潮流に沿うもので、京都在住で齢七十を超え、易学をもってすでに高名だった新井白蛾(1715-1792)(図7)を招聘したわけである。彼は在任わずか数ヶ月で没するが、「明倫堂」扁額を遺したことで今なお記憶されつづけることになる。

白蛾は最初江戸に私塾を開いていた。ところが、荻生徂徠(1666-1728)学派の勢いに押されて流行らず、京都に移住した。彼の父は前田家に仕えていたことがあり、明倫堂への就任もさかのぼればその縁によるものだった。



図7「新井白蛾」, 栗原信充『肖像集』から(国立国会図書館蔵)

たろう。白蛾は中国古典の注釈書を数多く著している(『論語彙解』・『老子形気国名解』など)が、なんといってもその本領は易であった。彼は占術としての易の性格を強調し、卦象を重視した。象とは、六つの爻から成る64通り(2の6乗)のパターンのことで、占いの結果得たその卦象全体に意味を見いだそうとする立場である。

「易は占術」とは当たり前のように聞こえるが、この頃は必ずしもそうではなかった。易には宇宙論・人間論が説かれているとして、その奥義を哲学的に読み込もうとする流儀が儒者の間に広まっており、彼らは占術としての実用性を一段下に見ていた。

特に中国宋代に活躍した程頤(1033-1107)『易伝』と朱熹(1130-1200)『周易本義』の2つの注解を重んじる朱子学派にあっては、易の占辞に「義理」(この世の道理)が込められているとみなすことは常識だった。彼らは漢代に成立した伝承にもとづき、易の卦は伏羲(三皇のひとりとされる太古の聖王)の発明、卦辞は周文王、爻辞は周公旦が著したと考えていた。儒教が理想とする太古の王朝三代には、夏では連山、殷では歸蔵、周では周易が使われたという説にもとづき、易は周王朝の創業者父子(文王と周公)の書物とされたのである。そして、十翼と呼ばれる部分(彖伝・象伝・文言伝・繫辞伝・説卦伝・序卦伝・雜卦伝)は孔子の著述とする。(現在の文献学の見解はこれらに否定的である。)

江戸時代、林家では林鷺峰(1618-1680)が『周易程伝私考』・『周易本義私考』という書物を編集し、程頤・朱熹らの注解を抜き書きしている。また、朱子学を批判して古義学を樹立したことで有名な伊藤仁斎(1627-1705)の子の東涯(1670-1736)は、『周易経翼通解』を著している。白蛾の易学は彼らと比較してどのような特徴を有するのだろうか。

通説として言われているのは、彼が各卦の象伝を重視し、それに依拠した占いの文言を記しているという点である。これは宋の邵雍(康節,

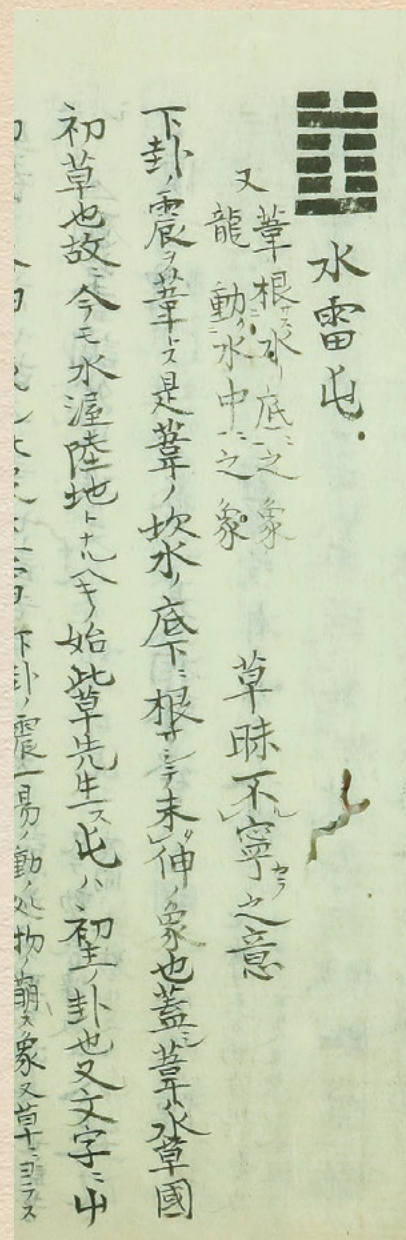


図8 新井白蛾「古易精義」
(金沢市立玉川図書館近世史料館蔵から
屯の卦の冒頭部分)

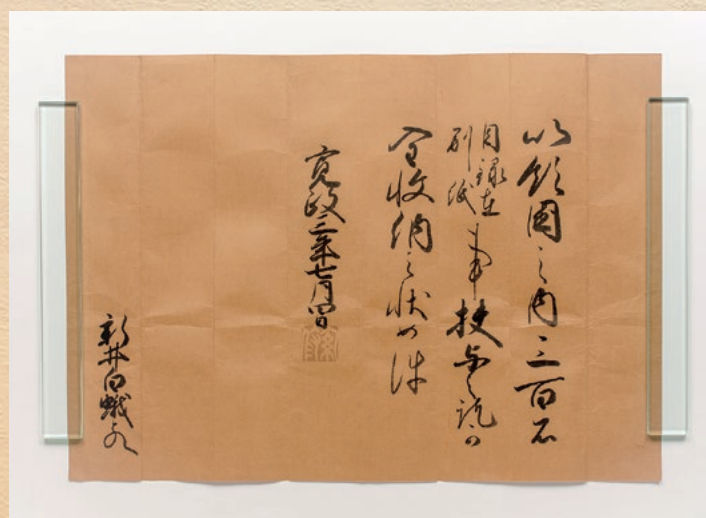


図9 「新井白蛾知行書」(石川県立歴史博物館蔵) 前田治脩が
明倫堂の初代学頭・新井白蛾に知行300石を宛行った際の書類

1011-1077)に仮託して明代に考案された梅花心易という流儀にもとづいており、白蛾は『梅花易評注』を著して邵康節の再来と評された。彼は梅花心易が仮託だと見抜いていたが、易の奥義を伝えているため占断に有効だと考えた。『易学小筌』という小著には、奈良場勝氏によれば、先行する平沢随貞(生没年不詳)という易占者の影響が見られる。

(奈良場勝「江戸の易占(ブログ版)」
<http://blog.livedoor.jp/narabamasaru-ekigaku/>)

白蛾には『古周易経断』^{けいだん}もあり、安永5(1776)年に刊行されている。宋代以降の中国の経学者たちの注釈を各爻まで集めているが、占断の辞は卦ごとである。諸注解のなかで最新のものとして、清の康熙帝^{しんこうきてい}(1654-1722)が編纂させた『周易折中』^{せつちゅう}から多くの引用が見られる。この書は実質的には康熙帝に仕えた李光地^{りこうち}(1642-1718)の労作であった。李光地は朱子学者ではあったが、宣教師たちを通じて西洋の科学についても知見を広め、大地が平面でなく球形であることを知っていた。

前野良沢(1723-1803)・杉田玄白(1733-1817)らによる『解体新書』の刊行が安永3(1774)年、本居宣長(1730-1801)『古事記伝』の刊行が始まるのが寛政2(1790)年。白蛾晩年には、儒学と仏教による知の独占状況が蘭学・国学の興隆で大きく変わろうとしていた。彼が金沢で教えた最後の1年間、そこで揮毫した明倫堂扁額は、藩学を場とする儒学普及の新たな展開を告げる狼煙^{のろし}でもあった。

❀ 「経武館」扁額を揮毫した前田直方について

竹松幸香(前田土佐守家資料館学芸員)

18世紀末、老中松平定信による寛政改革の一環として各地で藩校が設立され、19世紀に入ってその創設数はピークを迎え、幕末に至って250余の藩校創設をみた。加賀藩でも寛政4(1792)年、11代藩主前田治脩^{はるなが}の時代に藩校が創設され、主に藩士の子弟たちの就学が奨励された。文学校は「明倫堂」、武学校は「経武館」と名づけられ、現在の兼六園の場所に設置された。そして、文学校には創設当初に学頭として京都より招聘された儒者新井白蛾^{はくが}によって揮毫された「明倫堂」の扁額が、武学校には前田直方^{なおただ}(図9)によって揮毫された「経武館」の扁額がそれぞれ掲げられた。

「経武館」の扁額を揮毫した前田直方は、加賀藩の重臣・年寄衆八家の一つ前田土佐守家の6代当主である。寛延元(1748)年に前田土佐守家5代当主前田直躬^{なおみ}の三男として誕生、幼名は三次郎のちに九八郎といった。当初嫡子とされた長兄直履が夭逝したため、その代わりとして宝暦5(1755)年に8歳で嫡子となり、同13(1763)年16歳の時に元服するとともに、年寄衆八家の嫡子の慣例に従って新知二千五百石で召し出された。加賀藩の年寄家では当主が健在で嫡子が元服すると、新知二千五百石で召し出されて、城内の仕事に慣れさせることになっていて直方もそれにならったのである。

父直躬の死去にともない、安永3(1774)年6月に一万千石の家禄を相続、同年7月1日には月番・加判を命じられ、安永6(1777)年5月には人持組頭となり、正式に年寄衆の仲間入りを果たした。同年12月26日に従五位下に叙され、父に引き続き土佐守を通称とした。

以後、直方は10代藩主前田重教^{しげみち}、11代藩主前田治脩^{はるなが}、12代藩主前田斉広^{なりなが}のもとで三度、藩財政担当責任者である

勝手方主附に任じられて藩政の一翼を担った。寛政～文化初年にかけて一時、政務から離れていた時期もあったものの、文化9(1812)年に嫡孫前田直時へ家督を譲って隠居するまでの間、約40年の長きにわたって加賀藩年寄として手腕をふるって財政改革を推進、藩主および藩政をサポートした。文化13(1816)年には孫直時が従五位下土佐守に叙爵されたことから、通称を近江守に変更し、文政6(1823)年に76歳で没した。

前田直方は、勝手方主附として加賀藩財政と格闘した一方、好学の年寄衆八家の当主としての顔をもつ人物でもあった。

藩校が創設された頃、加賀藩では前田土佐守家をはじめとする上級武士の多くの家で、儒学者や和学者を召し抱えるようになった。彼らは家庭教師として上級武士家の子弟の教育や、当主の教養を高める役割を担っていた。前田直方も儒学者岡野和、七尾銅次郎などを召し抱えている。

前述のように、直方は文化9年に隠居したが、隠居後も加賀藩の財政問題に思慮をめぐらしていたようで、文化11(1814)年3月には、5代藩主前田綱紀時代からの藩財政の窮乏の過程を振り返った「御財用方覚書」を記している。その他にもその折々で思い巡らせたことを書き記した膨大な著作を残している。特に隠居後、亡くなるまでのものが多く、大半が和文で記されていることから、ある程度和学に通じていたことが推測される。

また、直方は書画とりわけ画を嗜んでおり、直方の手による福祿寿や龍の画などが伝存する。なかには加賀藩の絵師佐々木泉景が描いた福祿寿図に直方が讃を添えた掛幅があることから、泉景とも何かしらの交流があったことが推測される。

また、寛政6(1794)年に前田直方によって記された前田土佐守家の蔵品目録をみると、前田土佐守家に能面や装束が一通り揃っていたことがわかる。天明8(1788)年～寛政元(1789)年の1年間、参勤御供として江戸に出府した折に嫡子直養(前田土佐守家準代)と一緒に連れて行き、江戸の宝生太夫に入門させていることから、直方が能を嗜んでいたことが推測される。茶の湯に関しても、同じく寛政六年蔵品目録には茶道具が多く記されているのに加えて、先の参勤御供を終え、江戸から帰る際にかなり多くの茶道具を購入していることから、それなりに茶の湯の嗜みがあったことがうかがえる。



図10「前田直方画像」(前田土佐守家資料館蔵)

コラム

加賀藩校
扁額

～明倫堂・経武館～

❁ 上田藩に残る明倫堂の扁額、現代に受け継がれる明倫堂

笠原健司(金沢大学資料館学芸員)

「明倫堂」という藩校の名称は、加賀藩だけで使われていたわけではない。『近世藩制・藩校大辞典』で確認できるだけでも、北から出羽新庄藩、上田藩、小諸藩、尾張藩、安志藩、高鍋藩等がある。また、「明倫館」「明倫舎」も合わせて7校ほど確認でき、それぞれ創設時期は違うが「明倫」を冠する藩校は20校弱存在していたことになる。その中で、学校



図11 上田藩校明倫堂の扁額(上田市立博物館蔵)

名のある扁額が現存するのは上田藩のあった上田市、高鍋藩のあった高鍋町など、全国に多くはない。上田市立博物館蔵の上田藩校明倫堂の扁額(図11)は当館所蔵の扁額と同様に横書きであるが、より小型で軽量のため、室内に設置することも容易にできる。文字は金箔が施された額彫りで、背景は木地がそのまま活かされ、端に金箔の細い線がみられる。額縁(外枠)にも豪華な意匠はなく、漆塗りの簡素な作りである。資料の状態が非常に良いことから察するに、室内に設置されていた期間が長い可能性もある。字は上田藩5代藩主松平忠学(1788-1851)が揮毫したものである。上田藩校は忠学^{ただまさ}の先代忠^{ただ}済の時代から計画のあったものだった。文武両道

を^{ただ}かけており、武学校も存在していた。同館には藩校の建物が存在していた時代の写真も所蔵されている(図12)。同学校の校舍は、現在上田市立第二中学校がある場所、つまり上田城の西にあったが、明治25(1892)年に上田城址公園内旧本丸の地に移築され、昭和54(1979)年に取り壊されるまで料理屋として使われていた。

平成27(2015)年4月、上田藩明倫堂の扁額はもともと藩校があった場所にある上田市立第二中学校に寄託された。現在、扁額が掲げられている部屋は「明倫の間」と名付けられ、教員会議等で利用されている。同校は「明倫」という用語を学校目標にも使用しており、教育実践に藩校の伝統を引き継いでいる点で、藩校史以降の史実として貴重なケースではないだろうか。



図12 上田城址公園内にあった頃の藩校の建物の写真(上田市立博物館蔵)

❀『学校沿革史 石川県師範学校』にみる「扁額」と「加賀藩校」

藤原真理(金沢大学資料館学芸員補)

金沢大学資料館が所蔵する文書資料に、『学校沿革史 石川県師範学校』がある。学校が創立された明治7(1874)年から、昭和18(1943)年3月までの石川県師範学校の歩みについて、美しい筆致で綴られている。

「明倫堂」「経武館」の扁額は、石川県師範学校に伝世した。これらの扁額は、石川の教育を象徴するものとして、校内に大切に掲げられていた。『学校沿革史』には、そのことを物語るいくつかの記事を確認することができる。

昭和11(1936)年10月24日の項には、「扁額明倫堂、経武館ヲ講堂正面御真影奉安場両側ニ掛替ヲナス」とある。それまでは、「経武館」の額は武道場に、「明倫堂」の額は講堂内入口扉の上に掲げられていたが、二つの扁額を講堂正面に移設した(図13)という記録である。6日後の10月30日には、「教育勅語御下賜記念勅語奉讀式」を挙行了たと記されており、式に併せて扁額を移設し講堂を整えたと思われる。

「明倫堂」の名称に関連して、「鞍ヶ嶽明倫堂」(図14)についての記載も確認できる。昭和12(1937)年、鞍ヶ嶽(現・白山市)山中に修養道場が竣工し、「鞍ヶ嶽明倫堂」と命名された。当時は、戦争遂行に必要な「皇国民」の育成に

あたる教員養成が喫緊の課題であり、鞍ヶ嶽明倫堂は、師範学校男子部生徒を修養錬成するための施設として設置された。沿革史によると、落成式の日、生徒職員は電車を月橋駅で下車後、登山して11時半に開式した。式には、来賓として県知事も参列している。施設に「明倫堂」の名を充てたことは、修養の場であった藩校「明倫堂」にあやかったものと考えられる。



図13 石川県師範学校の講堂(金沢大学資料館蔵)



図14 鞍ヶ岳明倫堂(昭和初期)(金沢大学資料館蔵)

出品資料目録

	資料名	所蔵
1	明倫堂・講武館等之図	金沢市立玉川図書館近世史料館
2	広徳館絵図	金沢市立玉川図書館近世史料館
3	明倫堂御規則	金沢市立玉川図書館近世史料館
4	学校方覚書	金沢市立玉川図書館近世史料館
5	明倫堂並びに経武館督学勤方	金沢大学資料館
6	明倫堂扁額	金沢大学資料館
7	経武館扁額	金沢大学資料館
8	加賀藩年中行事図絵	金沢大学附属図書館
9	新井白蛾知行書	石川県立歴史博物館
10	新井白蛾小倉百人一首折衷本	石川県立歴史博物館
11	古易精義	金沢市立玉川図書館近世史料館
12	前田直方画像(レプリカ)	前田土佐守家資料館
13	明倫堂・経武館図	金沢市立玉川図書館近世史料館
14	学校惣囲絵図	金沢市立玉川図書館近世史料館
15	学校図并表	金沢市立玉川図書館近世史料館

❀ 協力機関(五十音順)

石川県立歴史博物館
上田市立第二中学校
上田市立博物館
金沢市立玉川図書館近世史料館
前田土佐守家資料館

❀ 執筆者(五十音順)

上田長生(金沢大学人間社会研究域准教授)
奥野正幸(金沢大学資料館長)
笠原健司(金沢大学資料館学芸員)
小島 毅(東京大学大学院人文社会系研究科教授)
竹松幸香(前田土佐守家資料館学芸員)
藤原真理(金沢大学資料館学芸員補)
松永篤知(金沢大学資料館特任助教)

❀ 主要参考文献

1 藩校とは

- ・ 石川県教育史編さん委員会(編)『石川県教育史』第1巻(石川県教育委員会,1974年)
- ・ 江森一郎「藩校教師の葛藤－十九世紀前半の加賀藩明倫堂を主対象として－」
(『勉強』時代の幕あけ－子どもと教師の近世史－』平凡社,1990年)
- ・ 笠井助治『近世藩校の総合的研究』(吉川弘文館,1960年)
- ・ 小松周吉「加賀藩明倫堂の学制改革」(『金沢大学教育学部紀要』人文科学・社会科学・教育科学編20・21,1971・72年)
- ・ 前田勉「加賀藩明倫堂の学制改革－会談に着目して－」(『江戸教育思想史研究』思文閣出版,2016年,初出2009年)
- ・ 山下武「加賀藩文武学校の設立について」(『早稲田大学教育学部学術研究－教育・社会教育・教育心理・体育編－』29,1980年)
- ・ 和田文次郎(編)『稿本金澤市史』学事編第1・2(金沢市,1918・19年)
- ・ 大石学(編)『近世藩制・藩校大事典』(吉川弘文館,2006年)
- ・ 金沢市立玉川図書館近世史料館(編)『平成29年度春季展 七日市藩と加賀藩』(金沢市立玉川図書館近世史料館,2017年)
- ・ 田川捷一(編)『加越能近世史研究必携 第2版』(北國新聞社,2011年)
- ・ 富山市郷土資料館(編)『特別展 富山藩校 広徳館』(富山市教育委員会,2002年)
- ・ 山田武麿ほか『上州の諸藩(上)』(上毛新聞社,1981年)

2 加賀藩校明倫堂・経武館の扁額

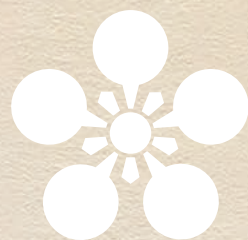
- ・ 国史大辞典編集委員会(編)『国史大辞典第3巻』(吉川弘文館,1983年)
- ・ 山下秀樹ほか「扁額の意匠と構造－平城宮第一次大極殿正殿扁額の復原考察－」
『奈良文化財研究所紀要2008』(奈良文化財研究所,2008年)

3 新井白蛾と前田直方

- ・ 鈴木由次郎『易と人生－新井白蛾の生涯とその詩－』(明徳出版社,1973年)
- ・ 辻本雅史『近世教育思想史の研究』(思文閣出版,1990年)
- ・ 奈良場勝『近世易学研究－江戸時代の易占－』(おうふう,2010年)
- ・ 日置謙(編)『石川県史第参編 藩治時代 下』(石川県,1929年)
- ・ 長山直治「年寄の手腕」『改訂新版 前田土佐守家資料館図録』(前田土佐守家資料館,2015年)
- ・ 前田土佐守家資料館「前田直方－加賀藩財政の一翼を担った年寄－」『起居録55号』(前田土佐守家資料館,2016年)

コラム

- ・ 上田市誌編さん委員会(編)『上田市誌13 歴史編(10)近世の庶民文化』(上田市誌刊行会,2004年)
- ・ 上田市立博物館(編)『松平氏史料集』(上田市立博物館,2010年)
- ・ 大石学(編)『近世藩制・藩校大事典』(吉川弘文館,2006年)



平成29年度 金沢大学資料館特別展

加賀 藩校 扁額

～明倫堂・経武館～

会期

平成29年9月1日(金)～10月27日(金)

編集・発行

金沢大学資料館

発行日

平成29年9月1日

印刷

能登印刷株式会社

「加賀藩校扁額～明倫堂・経武館～」正誤表

図録に以下の誤りがありました。お詫びして訂正します。

【誤】

【正】

2 頁 4 行目	(17 <u>8</u> 9)	⇒	(17 <u>9</u> 1)
3 頁 3 行目 ルビ	<small>はやしほんどう</small> 林 <u>柏</u> 堂		<small>はやしはくどう</small> 林 <u>柏</u> 堂
7 頁 7 行目	「御 <u>学</u> 」		「御 <u>額</u> 」
14 頁 3 行目	『近世藩制・藩校大 <u>辞</u> 典』		『近世藩制・藩校大 <u>事</u> 典』
17 頁 参考文献 コラム 3 行目	『近世藩制・藩校大 <u>辞</u> 典』		『近世藩制・藩校大 <u>事</u> 典』